

医療法人双樹会
よしき往診クリニック院長

守上佳樹

もりかみ・よしき ●1980年生まれ。六甲学院高校55期。2002年、広島大学学校教育学部卒業。08年、金沢医科大学卒業。京都大学医学部附属病院老年内科、三菱京都病院総合内科等を経て、17年、医療法人双樹会よしき往診クリニックを開業。2024年度末から日本医師会に招聘され、日本医師会未来医師会ビジョン委員会、京都府医師会地域ケア委員会委員。一般社団法人KISA2隊OYAKATA。京都市学校医会常任理事。京都府西京区警察医。



をもっと引つ張りだそうというわけです。
将来の危機に対応できるか改めて問い直す必要性
——2月15、16日には第1回学術総会も開催されます。その主題は「われわれはサピエンスたりうるのか?」です。非常に面白いテーマですが、これに込めた思いを教えてください。

横倉 人間はサルから進化しサピエンスという知能を持った種になりましたが、私たちは本来に将来の危機にきちんと対応できる種であるのだろうか。改めて問い直すということ。第1回学術総会のテーマを「われわれはサピエンスたりうるのか?」にしました。科学は各分野で目覚ましい発展を遂げていますが、地球温暖化も含めて地球上で起きている大きな災害に、きちんと対応が来ていない。この事実からもわかるとおり、「われわれはサピエンスたりうるのか?」という命題を突き付けられており、今回のテーマには、多くの人に考えてもらいたいという思いを込めました。
守上 大会長の細谷辰之先生は元名古屋大学経済学部教授で、医療者では考えつかないような投げかけをしてきています。たとえば、横倉先生も指摘されましたが、「人類は長い歴史のなかでさまざまな経験を重ねているにもかかわらず、同じ失敗を繰り返している」と。また、「社会実装」に向けて、「効率的に合意を持って次のステージに行くためにも少し考えて行く」といったことも言われます。日々の診療ではあまり意識しま

せんが、こうした投げかけをいただくことで、自分も地球上の一個体として、人類全体に貢献できる存在なのだという事実が気づかれます。この学会の素晴らしい点の1つだと思います。
——学術総会のセッション1は「あのパンデミックはなんだったのか? COVID-19から何を学んだのか?」です。まさに「サピエンスたりうるのか?」を問われるテーマですね。
横倉 人間はすぐに忘れてしまうものなのです。たとえば、東日本大震災の後も「次の震災のときにどのように備えるべきか」「避難された人たちの健康のためにどのような支援を行うべきか」の議論はありました。しかし、1年経ち、2年経つと、議論は行われるものの、本質からずれていってしまいがちです。コロナの場合、感染者は十億人近くに達し、世界中で多くの方が亡くなりました。パンデミックへの対応は常に考えておかななくてはなりません。
第一波のときに思ったのは当初、マスクなど個人の感染予防具が不足していました。その十数年前に新型インフルエンザが大流行

一般社団法人日本危機管理医学会
第一回 学術総会
テーマ：
「われわれはサピエンスたりうるのか」
日時：2025年2月15、16日
会場：福岡県医師会館
(福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30)
形式：現地参加およびオンライン
主催：一般社団法人日本危機管理医学会

続きは、本誌1月号をご覧ください

日本危機管理医学会理事長
日本医師会名誉会長

横倉義武

よこくら・よしたけ ●1944年生まれ。久留米大学医学部卒業。医学博士。2006年、福岡県医師会会長。12年、第19代日本医師会会長。17年、世界医師会長(日本人3人目)などを経て、現職。日本医師会名誉会長。近著『未来の医療界を牽引するリーダーたち—日本医師会長回想録—』(日本医療企画)



医学の専門家が集まって生存危機を乗り越える策を模索
——2020年11月に日本危機管理医学研究会を立ち上げ、24年5月には一般社団法人日本危機管理医学会を設立されました。この時期に「危機管理」をテーマにした学会をつくられた意図を教えてください。

横倉 医療人の仕事として最も大切なことは、国民の生命と健康を守ることです。私が日本医師会会長をしていた時に、新型コロナウイルスの第一波に襲われました。当初は病理学的にも不明な点が多く、世界各地で混乱を起こしていました。当初はこの危機をどう乗り越えるか、私は世界医師会会長を務めた経験もあつて世界各国にネットワークがあつたので、当時とはかくヨーロッパやアメリカ、中国などから多くの情報を集めました。日本医師会会長を退任した後もこのチャンネルを活かして、医療界に貢献しようとして、2020年に現在の学会の前身である日本危機管理研究会を立ち上げたのです。1回目の会合には、早期の流行の抑え込みに成功した台湾の医師会と台湾のCDCの担当者をお願いしてオンラインで講演してもらいました。設立の趣旨に「人類の生存と安寧のためには、科学の成果は最大限に社会実相に反映されることが望ましい」と掲げていますが、人類の生存危機を乗り越えるために、私たち医学の専門家は何をすべきかを考えています。幸いなことに学会には社会学の専門家にもメンバーとして入ってもらつていま

す。具体的な活動としては、2か月に1回、さまざまな分野の専門家を講師として招き、最新の話題を提供してもらい、ディスカッションを重ねてきました。
守上 危機管理には多角の視点・論点があり、さまざまな業界のトップランナーのような人たちとの話をみっちり聞くことができます。ことはとても勉強になります。コロナ禍もそうですが、災害などの有事の際は、自宅や避難所から出られなくなるようなケースが置きます。そうした際に、訪問診療、もっと言うとお出向く医療を行っている自分たちが貢献できる余地が大きいと考えています。訪問診療を行っている医療者が危機管理について学ぶことは、自分たちのフィールドを広げることにつながると思います。
また、学会では2カ月に1回の会合の合間に、若手の医療者が医師としてリーダーとしても先輩である横倉先生と自由に意見交換ができるトークセッション「危機管理カフェ」をオンラインで開催しています。実は私もそこで横倉先生と一度対談させていただいたことがあります。夢のようなワクワクする時間でした。

横倉 カフェは、危機管理に関心を持つ人々を増やすことを主な目的としています。専門家による高度な議論も重要ですが、同様に裾野を広げる活動も大切だと考えています。
——医療経営の観点から言うと、感染症や災害などの有事に対する危機管理は非常に重要なテーマである一方、直接的に医療の質や効率性の向上につながるものではないため、後回しにされがちです。
守上 確かに一昔前は平和な時期が長期間続き、その合間に災害等の有事がときどき起きるというイメージがありました。しかし、コロナ禍に加え、毎年のように震災や台風、大雨などの自然災害が続いており、有事と有事の間についての間の平和があるというのが現実となっております。もはや危機管理は最大の経営課題と言つても過言ではないと思います。
横倉 そもそも医療というものは危機管理です。たとえば、一般の人たちからすると、病気にかかるということ自体が危機なのです。そのため、医療者は心の奥底に危機管理意識を持っています。それ